地域学校版

ほっとニュース

宮城県立古川支援学校　特別支援部　NO. ５　　２０１８．１０．３１発行

秋も深まり，朝夕には肌寒さを感じるようになりました。各学校では，学習発表会や文化祭の時期かと思います。行事は，子どもたちの成長の機会でもあります。子どもたち一人ひとりにとって実りの多い秋となることを願っています。

～ 障害とは？どのような状態を障害というのでしょう～

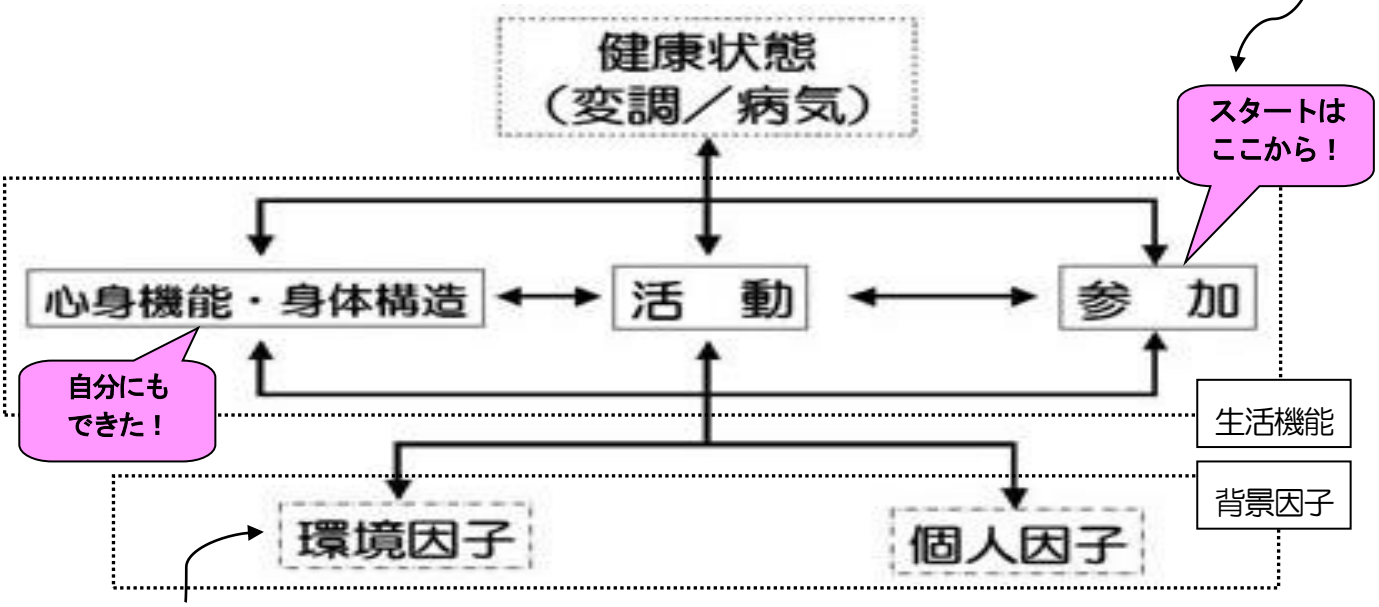
現在の障害の捉え方は大きく変わっています。

本人の困難な面を障害とするのではなく，「生活機能」の面から障害を捉える考え方で，生活機能に何らかの問題が生じた状態を「障害」といいます。これは，「国際生活機能分類（ICF）」といわれるもので，2001 年に世界保健機構（ＷＨＯ）において採択された障害の考え方です。人々の生活機能（心身機能・身体構造，活動，参加）の状態をその人をとりまく環境も絡めながら評価し，必要な支援などを検討していくことができます。

また，これまでの障害者観から大きく発想を転換し，障害のある人を「何もできない（他者より劣る）特別な人」と見るのではなく，生活する上で何かの不自由さや困難さを抱えている人と考え，障害は誰もがもちうるもので，全ての人に当てはまるとしています。

＜国際生活機能分類（ＩＣＦ）＞

※ 参加するために，どのように環境因子等を調整すればよいかを検討します。



※ 教師の関わり方や対応も環境因子の一つです。

「基礎的環境整備」や「合理的配慮」にもつながる考え方です。

※ICF の考え方，支援のポイント

「障害があるからできない」のではなく

「どのような支援があればできるのか」を考えます！

ご参加いただき，ありがとうございました！

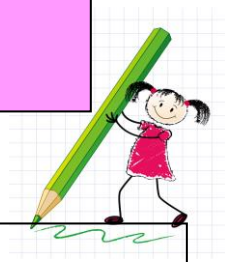
後期インクルーシブ教育理解研修会

１０月２２日（月）　登米合同庁舎を会場に，後期インクルーシブ理解研修会が行われました。当日は，気仙沼・南三陸地区，迫・栗原地区，石巻地区，大崎地区より，７０名程の皆さんにご参加いただきました。

テーマ　「どの子にとってもわかりやすく，くらしやすい学級づくり，授業づくり」

～インクルーシブ教育システム構築を目指して～

宮城学院女子大学　教授　梅田　真理　氏



１　インクルーシブ教育システムと特別支援

「特別支援教育」・・・どの子にとっても必要な理念

「特別支援教育」とは，障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち，幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し，その持てる力を高め，適切な指導及び必要な支援を行うものです。

世の中・学校では・・・

・発達障害についての理解は進んでいる
・気づきも増えている

発達障害の多くの子は，
通常学級が居場所！

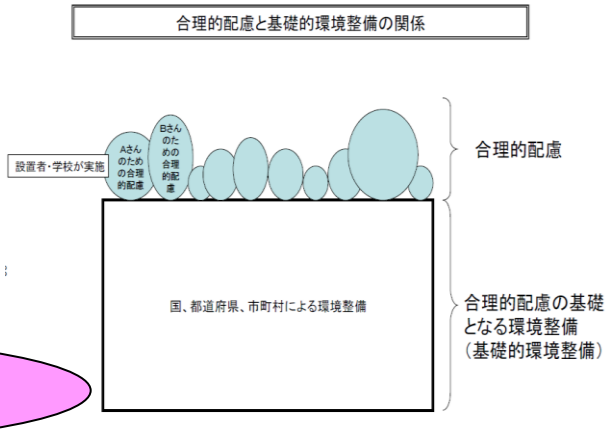
しかし…

→「発達障害だから…」「大変だ」で止まってしまうことも多い
→詳しく見ることは専門家に任せがちになってしまう

何ができるか
一緒に考える
という姿勢が大切

障害者基本法・・・

（教育）第十六条　国及び地方公共団体は，障害者が，その年齢及び能力に応じ，かつ，その特性を踏まえた十分な教育が受けられるようにするため，可能な限り障害者である児童及び生徒が障害のない児童及び生徒と共に教育を受けられるよう配慮しつつ，教育の内容及び方法の改善及び充実を図る等必要な施策を講じなければならない。



学校で，どう特別支援を捉えるか
学校組織で取り組むことが必要！

個々に応じた支援のために・・・

・合理的配慮を行う上では，より正確な実態把握が大切
・診断名にこだわらず，ひとり一人の状態をよく「見る」（観察する）ことが大切
・特に発達障害においては，子どもによっては，**「なまけ」**や**「わがまま」**と**見えてしまうもある**ことを知っておく

切ってしまわないで，**「なぜそうなるのか」の視点をもつ**ことが重要

２　「学びにくさ」への気づきと対応

ユニバーサルデザインの前に・・・学級づくりの基本をおさえる！

基本その１：個別の支援の前に…**学校全体で**学習環境を整える

１）教室環境の整備

・整理された教室（備品，掲示物など）

掲示物は何のために貼るのか？
貼る意味を考え，精選と活用を！

・学級の物と個別の物の区別
・プリント類の保管（ノートに貼る，綴じるなどの作業時間の確保）

２）学習形態の工夫

・集中力を考慮した授業構成，授業形態の工夫
　ペア学習，グループ学習，一斉指導，個別の学習

３）学級のルールを決める

ルールは，守らせるためのもの
守れるルールを設定！

・みんなに分かるように明確に示す
・叱る基準を明確にする（なぜ叱られたか分かるように）
・守れたことへの評価

これから３つのことをやります。
１問題を解く
２答え合わせ
３読書
確認します。
１問題，２答え合わせ，３読書です。
では，始めてください。

４）分かりやすい指示

問題を解いたら，答え合わせをします。終わったら本を読んでいいです。では，始めてください。

・具体的で簡潔な指示
・学習のめあては初めに示す
・一度出した指示は変えない
・子どもが活動している時は指示をしない

５）見通しをもって生活する

・予定は目に見える形で知らせる（学年便り，学級便りの活用，行事黒板の活用）
・一日の予定はよく見える場所に書いて伝える（変更点は言葉も添えて丁寧に伝える）

６）必要な物を忘れない工夫

積み重ねが大事！

・早めの連絡
・メモをとる習慣づけ→**トレーニングが必要**
・忘れた時に対応できるよう，教師側で準備しておくことも大切

基本その２：集団で育つ

・分からない　・自信がない
・失敗が多い　・居場所がない

＊「参加する」「分かる」「できる」経験
＊自分の役割があり「認められる」機会
＊「教え合う」「支え合う」人間関係

支援を受けるばかりの生活は，楽しいと思えるか？
小さなことでも人の役に立つ実感が大事！

学級への帰属意識（居場所がある）
仲間がいるという安心感
自分に**自信**をもつ

自立に向けた原動力！

基本その３：分かりやすい授業づくり

静かな環境で学ぶことが分かりやすいことを体験させることが大事！
定着までに時間がかかることも覚悟して！

１）聞く姿勢を作る

・静かになってから話す習慣づくり
・分かりやすく短い発問
・１つの指示で一つの活動

２）授業の構成

・活動の流れを文字や図で示す（あとどのくらいが分かるように）
・活動のパターンを作る　「聞く」→「見る」→「考える」→「書く」→「発表する」
・活動時間を短くする

３）発表・指名の仕方

・ルールを守って発表する（騒いでも指名しない）
・話し方の手順を決めて提示しておく（「発表の仕方」等）
・発表しようとした姿勢を褒める

４）ノート指導

・板書の工夫：文字の大きさ，量，色を意識する　　写す部分を明確にする
・書きやすいノートの準備（マス目，横罫）
・ノートの使い方を丁寧に指導する（実物投影機の活用）
・ワークシートの活用

３　自立に向けて

上手に手を離していく・・・環境のベースを整えながら，個別の支援を減らしていくことも

自立に向けて大切にしたいこと

個別指導の場で，得ることは難しい。集団の場で取り組む。

＊「社会（家族…etc.）にとって必要な人間である」という意識をもつこと
＊自分の特徴を理解し，周囲の資源や援助をうまく利用していく能力を身に付ける

自己有用感

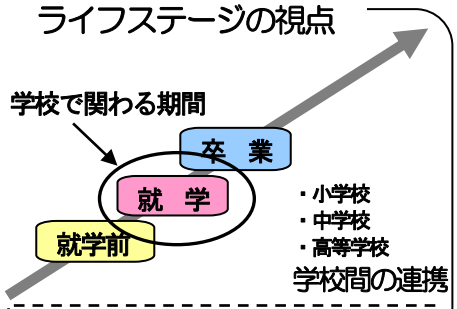
自尊感情を高める

自己評価

自己理解

＊自分の特徴を知る
<得意・不得意を正しく理解する>
・自分のよい所，得意な部分を知る
・弱いところ，不得意な部分を知る
「学びのスタイルは人それぞれ」という認識できること

ライフステージの視点

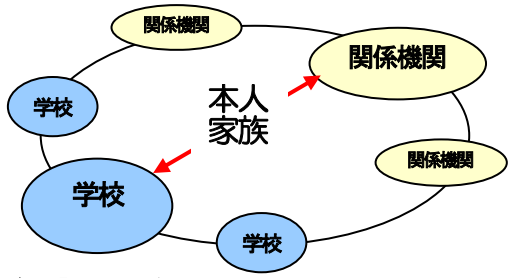


平均寿命 80 年時代
卒業後の時間は 62 年
教員はずっと支援できるのか？

子どもの成長

連携

本人や保護者自身が「連携」できるように



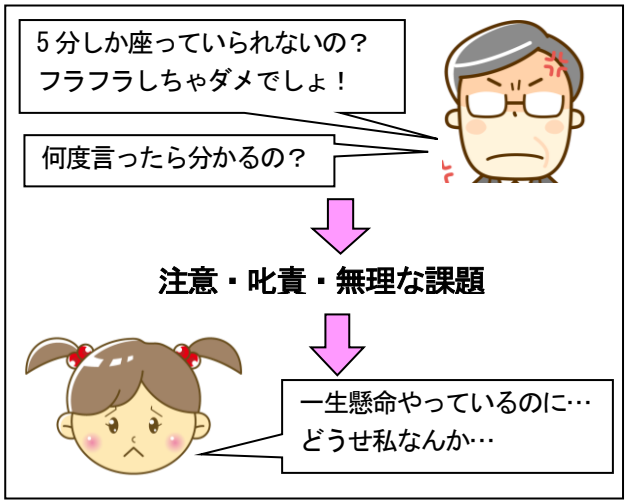
そばに「先生」がいなくなってから慌てて探すのではなく，徐々にシフトチェンジしていけるように

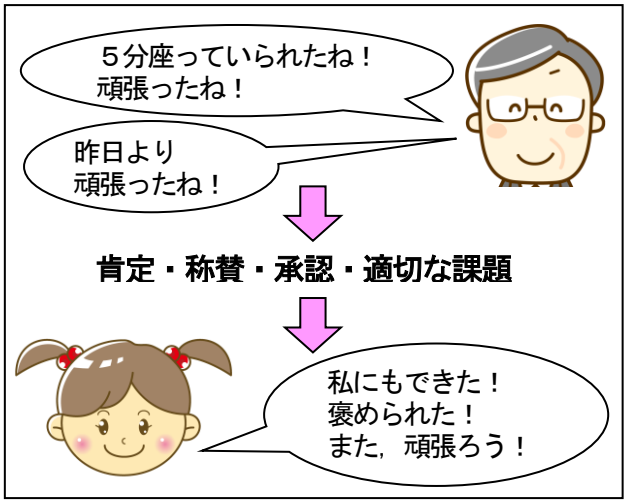
進路選択

・どのような進路であれば自分の特性を活かせるか？
・どんな目標があれば頑張って仕事ができるか？
※教師が支援の輪から抜けた後を考えながら支援する

ユニバーサルデザインの視点からの　ほめる・叱る

落ち着きのない子どもに対してどのように対応しますか？事実は一つでも，同じ事実に対して１８０度違う見方，言い方ができます。





問題となる事実の背景には…

① “やってはいけない”というを本当は分かっていないために，本人は全く悪気なくやってしまう。
② “やってはいけない”ということを分かっているが，“正しいやり方”を分かっていないために，同じような間違いを繰り返してしまう。
③ “やってはいけない”ということの“正しいやり方”も分っているけど，ついついやってしまう。
④ “やってはいけない”ということを分かっているが，わざと違うことをして気を引こうとしている。

背景が違うのに…同じ叱り方でよいですか？

見方を変えて支援を変える

“困った”子どもではなく，実はよくわからなくて，上手くできなくて“困っている”子どもかもしれません。子どもは「小さな大人」ではありません。大人には“当たり前”のことでも，子どもにとって“当たり前ではない”ことも多くあります。まだ知らないこと，まだできないこともたくさんあることを認識することが必要です。

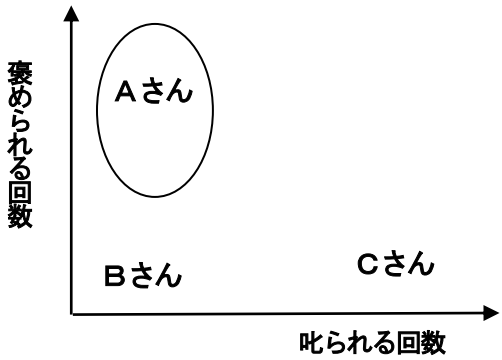
「何度言ったら分かるの！」と叱られる子どもは“ほめられる経験”が少なく，むしろ誤解され，“叱られる経験”の方が圧倒的に多い子どもと言えるかもしれません。叱られてばかりの毎日は，大人でも辛いものです。

「気になる」行動に目を向け，それを叱って減らす発想ではなく，問題を起していない姿を“できて当たり前は頑張っている姿”と見方を変え，それらをほめて増やす逆転の発想の対応が必要かもしれません。

「ないと困る」「あると便利で・役立つ」ほめ方・叱り方

右図のＢさんは，ほめられることもなければ，叱られることもなく，学級の中で疎外感・孤独感を味わっているかもしれません。Ｃさんは叱られることが多く“困った”子ども扱いをされています。

子どもならば，誰しも「ほめられたい！認められたい！」と思ってます。Ａさんの位置する部分に一人でも多くの子どもが入ることが理想的といえます。

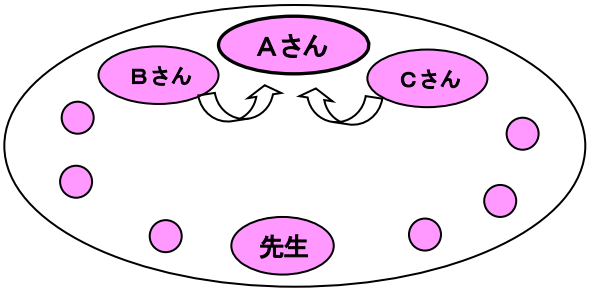


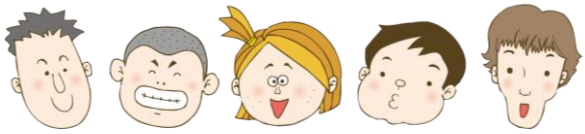
ほめるという教師の行為は，Ｂさんの満足度・自己肯定感・安心感を高める上では「ないと困る」支援です。そのほめ方の中には，どの子にも「あると便利で・役に立つ」ほめ方もあるはずです。

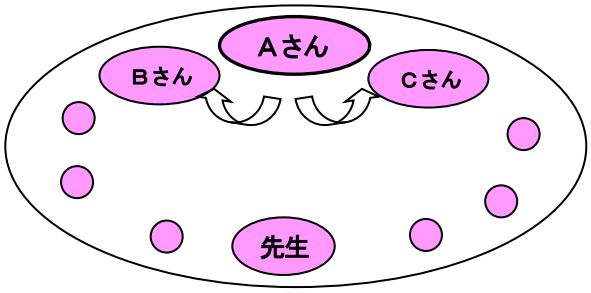
Ｃさんにとっては，ほめられる経験は不可欠です。いつもと同じ叱り方を続けるのではなく，Ｃさんの心に響く「ないと困る」効果的な叱り方を考える必要があります。その叱り方は，どの子にも伝わりやすい「あると便利な叱り方」になるはずです。

学級が落ち着きをなくすとき…

“困った”行動の多いＡさんに対し，教師の注意や注目が多くなるとＢさん，ＣさんがＡさんの“困った”行動をはやし立てたり，同調したりする状況になります。**教師の注意や注目が，学級の子どもたちに“困った”行動を意識させてしまう結果**，Ａさんの“困った”行動がＢさん，Ｃさんの悪い手本になってしまう状況になってしまうのです。







周りの子が手本になる…

Ａさんも含めて初めからルールを破ろうとする子どもはいません。どの子どもも，当初は約束やルールを守ろうとしているその姿をほめることがポイントです。約束やルールを守っているＢさん，Ｃさんをほめるのです。

“困っている”子どもの手本になるように，**周りの子供たちを育てる対応が必要**なのです。「約束やルールを守るとほめてもらえる！」ことを**Ａさんが気付きモデリングができるようにしていく**のです。

約束やルールを守る当たり前のことをほめることが，学級の中の“困った”行動を減らしていくことにつながります。

“困った”行動は，気を引く行動であることも…

学校生活の中で居場所が少なく，認められる機会が少ないことが，子どもの中で内在化してしまう場合は，不登校という行動に，外在化する場合はなんらかの**“困った”行動を起こすことで気を引こう，注目を集めようとする行動**に現れることが少なくありません。

「注目されたい！」「かかわってほしい！」という気持ちで，子どもが“困った”行動をしているとすれば，例えば，教室を飛び出す子どもを追いかけることは，子どもにとっては「困ったことをすれば，来てくれる！見てくれる！かまってもらえる！」と誤学習してしまうことになります。このような行動を**社会的注目行動**と言います。この行動には，“無視する”ことが一番効果があるといわれていますが，学校の中では，次のような対応をすることで，行動の改善が見られます。

- ○“困った”行動をしていない“普段の姿”＝ 望ましい“いい姿”に注目してほめる。
- ○“困った”行動に対しては，大げさにせず，たんたんと“～するよ！”と肯定的に伝える。やってほしい正しい行動を伝えることに徹する。

ほめることを前提に叱る

日常的に「先生は見てくれている！　頑張るとほめてくれる！」という感覚を子どもがもっていることが大切です。**ほめる・認めるの称賛・承認のベースがあり，信頼関係が築かれているからこそ，“叱る”ことの効果が発揮される**のです。

また，**“叱る”ことの教育としての効果を発揮するのは，子どもに次はどうすればいいかを理解させること**です。**冷静な気持ちで叱ることができているでしょうか？** 感情的になっている場合は，その行為は“叱る”ではなく“怒る”であるといえます。**“怒る”ことの教育的な効果はありません。**

参考・引用図書・資料：

＊平成 30 年度特別支援教育総合推進事業インクルーシブ教育理解研修会後期北部ブロック資料

＊逆転の発想で魔法のほめ方・叱り方　実践通常学級ユニバーサルデザインⅢ　　佐藤 慎二 著　　東洋館出版社